アンナ・バルツァー制作　ＤＶＤ

# 「占領下の生活」スクリプト全訳

00:00　こんにちは。私はアンナと言います。これから、ヨルダン川西岸地区に拠点を置く、「国際女性平和サービス（IWPS）」という団体で私が経験したことをお話しします。そこでは主に二つの仕事をしました。この地域で行われた人権侵害を記録することと、占領に対する非暴力的抵抗への支援です。

「占領」がどういったものかをお話しする前に、少しだけ私自身について話しておきます。私は、ユダヤ系アメリカ人で、この仕事は私がトルコに住んでいる時に始めました。休暇で中東を旅行し、イランやシリア、レバノンに行きました。そのとき、いろいろな家庭に泊めてもらったのですが、その多くがパレスチナ難民のお家でした。出会った人々との親交を通じ、私は初めてイスラエルとパレスチナの現在と歴史に対する全く異なった意見を聞くようになりました。それは、ユダヤ系アメリカ人として育ち、学んできたこととは、全くかけ離れたものでした。

01:00　私は、そこで聞いたことにとても動揺し、驚きました。すべてがプロパガンダのようで信じられませんでした。でも、それらの話は私の中に撒かれた種のように、私は自分で調べ始め、自分の目で何が起こっているのか確かめようと思い、ついにパレスチナに行くことを決めました。これからお話しするのは、初めてパレスチナに行った時に発見したことです。私はこの紛争の歴史を、包括的に分析するつもりはなく、また、この問題に1つ1つ意見を挟むつもりもありません。ヨルダン川西岸で5カ月間働いたユダヤ系アメリカ人としての視点をお伝えします。

パレスチナに着くと、もちろん行く先々に多くの驚きがありました。しかし一番驚いたのは、パレスチナの美しい風景でした。それまで中東というと、砂が渦巻く砂丘や荒れた砂漠を想像していましたが、パレスチナに着いて、とても美しい場所だと気がつきました。この写真は、春のパレスチナです。とても肥沃で緑が多い土地だとお分かりになるでしょう。

02:00　しかしこの写真は、美しさ以上に、私の考えるイスラエル・パレスチナ紛争の真髄を示しています。多くの人が、この問題を古くから続くユダヤ教徒とムスリム〔イスラーム教徒〕の争いが原因だと思い込んでいます。この問題は宗教的な違いに深く根ざしているから、何千年も続いてきたので、さらに何千年も続くだろうと思い込んでいます。パレスチナに着き、まず気がついたのは、この争いは土地や水、資源をめぐる争いであり、決して宗教が理由ではないということでした。今日は、私がこの結論に至った理由を明らかにできればと思います。

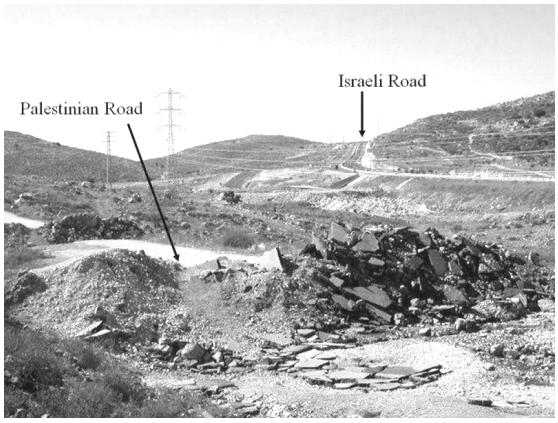
さて、位置を確認するため、中東の地図を用意しました。イスラエルとパレスチナは中東にあり、この紫色と銀白色の小さな場所になります。これは拡大した地図ですが、このベージュの部分は事実上、承認されているイスラエル国家の境界を示しています。

03:00　一方、右手と左手のピンク色の部分は 1967 年に占領されたパレスチナの領土です。左手がガザ地区、右手がヨルダン川西岸地区です。私はヨルダン川西岸地区の村に住み、今日使う写真やお話も西岸地区についてのものです。これらの地域は占領されたパレスチナの領土と呼ばれます。占領されているということ。これが何を意味するか分かりますか？この占領について伝えることが私の目的です。

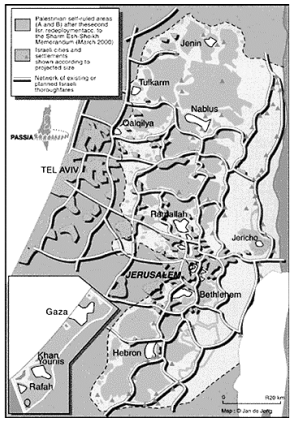
初めに占領の構造について説明します。何が占領を作り上げるのか。ここでは移動制限、検問所、道路封鎖について話します。そして、入植地やアウトポスト、壁、投獄についてもお話します。これらのシステムの概要を説明した後、人々がそれに対してどのように反応し、どのようにそれに抵抗しているのかをお話しします。その後、

04:00　日々行われている「非暴力的抵抗」に触れ、特にデモについてお話しします。イスラエルで行われている運動についてもお話しします。

では、移動制限について説明しましょう。パレスチナ領には、パレスチナ人とイスラエル人の双方が暮らしていますが、両者は異なる道路を使います。パレスチナ人専用道路とイスラエル人専用道路があるのです。この写真のようにパレスチナ人専用道路には古びたものが多く、使えないものもあります。一方、イスラエル人専用道路は現代的で、イスラエル政府が、占領地に住むイスラエル人のために作りました。この写真のように、４車線の幹線道路のようなものもあります。パレスチナ人は、許可がない限り、イスラエル人専用道路を使うことは許されていません。許可が出ても、決まった道路の決まった部分しか利用できません。しかし、全般的に両者の道路は切り離されています。パレスチナ人とイスラエル人は違う色のナンバープレートを付けます。パレスチナ人の車は緑と白、イスラエル人の車は黄色です。




05:00　なので、遠くからでも、車に乗っているのがパレスチナ人なのかイスラエル人なのか、簡単に見分けられます。これは、その地域に配置されたイスラエル兵が、誰がどの道を使っているか、監視する助けになります。たとえば、ここではイスラエル軍のジープが、緑と白のナンバープレートの車をすべて道路の片側に寄せています。その一方で、黄色のナンバープレートの車は、邪魔されることなく左側を通ることが許されています。これが検問所です。検問所は占領において主要な施設で、パレスチナ人歩行者や通行車両の管理に慣れた兵士や国境警察が配備された障壁です。検問所で経験することは、国境を越えるときに似ています。列で順番が来るのを待って、身分証を提示し、いくつかの質問に答える。鞄を開けることもあるかもしれません。しかしパレスチナ領にある検問所がそれと大きく違う点があります。これは西岸に常設された検問




所の地図で、青色の部分が検問所を示していますが、

06:00 これらの検問所のほとんどは、西岸地区との境界には置かれず、実際はパレスチナ自治領の内部にあり、パレスチナ人の村や都市の間に置かれています。これは、たとえば西岸南部のヘブロンに住むパレスチナ人にとって、どのような意味を持つでしょう？たとえば 30 マイル北のベツレヘムに行くとします。30 マイル。普通なら 30-40 分、長くて1時間ほどです。しかしパレスチナ人はたった 30 マイル離れた所に行くにしても、2時間から4時間、または8時間、さらには丸1日かかることもあります。行く先々の検問所で何度も足止めされるからです。これは、当然、苛立たしいことです。ある場所から他の場所に行くのに、検問所で何時間も何日間も待たなくてはならないのです。

07:00 でも検問所は、苛立たしいだけでなく、パレスチナ人の日々の生活の全面に渡って、圧倒的な損害を与えています。検問所は、たとえば、パレスチナ人が安定した仕事を得るのを困難にします。自分の住む村から近くの街まで通勤するのに、10 分で済むのか、それとも3時間かかるのか全く分かりません。同様に、毎日授業に出席することもほぼ不可能です。自分の住む小さな村に大学がない限り、高等教育を受けるなど論外です。パレスチナ人にとって検問所は、単に悩みの種や負担であるだけでなく、生計をたて、教育を受ける妨げにもなります。それだけでなく、結婚式や葬式、卒業式に出ること、親族を訪ねることなど、日常生活のあらゆる面に影響します。あなたがもし、仕事場や学校や教会その他どこに行くときも、何か所もの検問所で2時間も3時間も待たされなければならないとしたら、

08:00 あなたの生活がどんな影響を被るか、想像してみてください。検問所がどれほどパレスチナ人に害を与えてきたのか、少しはお分かりいただけるのではないでしょうか。これはナブルス郊外にあるフワーラという検問所です。私たちはここを監視しながら、起こったことを記録しました。この日、検問所のルールは次のようなものでした。「女性・老人の男性・子供は検問所を通過できるが、15 歳から 40 歳までの男性は通過できない。以上。」どこから来たのか、どこへ行くのか、何者なのか、緊急事態かどうかは関係ありません。15 歳から 40 歳の男性なら、家・仕事場・学校・病院その他どこにも行くことができません。

09:00 ここに集まっているのは、文字通り何百人ものパレスチナ人で、彼らはもしかしたらルールが変わることがあるかもしれないと願いながら、検問所の前に集まっています。ある時、2人のパレスチナ人がゴミ袋を手に取り、必死になってゴミをかき集めていました。私は彼らに、なぜ突然ゴミを集め始めたのか尋ねました。彼らは、イスラエル兵たちがゴミ袋を渡し、これをゴミで一杯にできたら、検問所を通るのを許すと言われた、と答えました。健康を脅かす暴力も、検問所と、占領下の状況一般における大きな問題となっています。ここでは、黄色のナンバープレートのイスラエル車を優先的に通すため、緑と白のナンバープレートのパレスチナ人救急車が、道路の脇に寄っています。救急車は、時には検問所自体に到着するまでに何時間も待たされます。検問所に着いてもすぐに通過できることはほぼなく、写真のように銃が突きつけられ、別の兵士が救急車の後ろから検査をします。救急車はしばしば一般車よりも長く待たされます。

10:00 その理由は、過去に救急車がイスラエル政府に指名手配されている人々や武器を運ぶのに使われたことによるようです。この件に関する記録を調査したところ、実際にそうした目的に救急車が使われたことがありました。しかし、たとえ救急車がそのような目的で利用され、たとえそれが真実だとしても、忘れないでほしいのは、この救急車はパレスチナ人の村からパレスチナ人の街へ移動しているのだということです。西岸からイスラエル国内に移動しているのではないのです。検問所が設置されているのは、パレスチナ人の居住地域であり、そこで救急車を停め、運ばれる命を危険に晒しているのです。こうしたことが、イスラエル人の安全保障に貢献するのでしょうか？ましてやパレスチナ人すべての安全保障については言うまでもありません。これは、私がしばらく過ごしたデイル・バッルート村外れの検問所です。

11:00 この検問所は朝7時から夜7時まで開いています。つまり、もし夜7時から朝7時までの間に緊急事態が起こっても、運が悪かったとしか言えないのです。実際、双子を身ごもった妊娠7カ月の女性の陣痛が朝1時に始まったことがありました。夫は、彼女を車に乗せ、必死で検問所まで運びました。一番近いラーマッラーの病院までは1時間ほどで、途中で検問所を通らねければなりませんでした。検問所に着くと、寝ていた兵士が降りてきて、とても丁寧に言いました。「いいですか。はっきりしたルールがあります。パレスチナ人は朝7時までここを通れません。7時にまた戻ってきてください。」彼女が赤ん坊を産むのに6時間も待てないのは明らかだったので、彼らはもっと主張しました。しかし兵士たちは、丁寧に、申し訳なさそうにしながら、同じことを何度も言いました。「いいですか。私たちがルールを作ったのではありません。私たちはこのルールに賛成さえしていません。ただ命令に従っているだけです。」

12:00 「ただ命令に従っているだけ。」毎日のように兵士たちがこの言葉を口にするのを耳にしました。確かに兵士たちは「ただ命令に従っているだけ」なのです。そこで夫は、そこから1時間ほどのラーマッラーから検問所まで救急車を寄こすよう電話することにしました。そうすれば彼女は、検問所を通って車から救急車まで 5 歩、歩くだけでいいのですから。1時間後、救急車が着くと、兵士たちが頭を横に振りながら再びやって来ました。「いいですか。車で通るか、歩いて通るかの問題ではないのです。あなたはパレスチナ人で、今はまだ真夜中です。通ることはで

きません。」この期に及んで夫婦は怒り心頭に達し、友人みんなに電話をかけまくりました。多くのパレスチナ人同様に、彼もイスラエルで働いたことがありヘブライ語を話します。軍の高官を知っているイスラエル人の友達と連絡が取れ、妻には検問所の通行許可が出されました。しかし兵士たちは、夫が一緒に行くことは許可しませんでした。彼女は救急車に乗り込んですぐに双子を出産しました。

13:00 双子は基本的には健康に生まれたものの、予定より2か月早く生まれ危険な状態だったため、病院での処置が必要でした。真夜中にボコボコの道を1時間かけて移動し、検問所で2時間も待たされたため、病院へは間に合わず、赤ん坊は2人とも亡くなりました。この話をしたのは悲痛な話だからでも、これらの兵士を怪物扱いするためでもありません。私はニュルンベルグ原則にあるように、ある行為を行った者は、たとえ命令に従っただけでも、責任があると考えます。つまり、私が思うに最大の犯罪とは、いい人かもしれないし悪い人かもしれないそれぞれの兵士の振る舞いにではなく、制度そのものにあるのです。人が病院に行けるかどうかをそこにいる兵士がコントロールするなどという形でものごとが構造化されているという事実。これこそが最大の犯罪なのです。

**［道路封鎖］**

14:00 これはデイル・バッルート村外れの検問所だと言いました。村自体は、写真の左に広がっています。村から直接検問所に向かう道路がありますが、村人たちは通ることを許されていません。道路に障害物が置かれているからです。障害物はこのようなコンクリート製のブロックで、パレスチナ人が車で通れないよう、道路に置かれます。これらの道路障壁のために、デイル・バッルート村では、毎朝通勤・通学の際、村から半マイルの舗装道路を通って検問所へ行く代わりに、ぐるっと迂回して3マイルもの未舗装の田舎道を通って検問所まで行かねばなりません。このため、更に時間やストレスがかかり、自動車が消耗し、燃料代がかかります。これもまた安全保障のためだとされるのです。これらの制度、検問所、道路障壁は、イスラエル人の安全保障のために、テロを防ぐためにあることになっています。

15:00 これらの道路障壁がどのように、誰の安全を確保するのでしょうか。パレスチナ人に長い回り道を強いることで、どれだけ安全保障対策に役立ち、どれだけコントロールに役立つのでしょうか？道路障壁には泥で作られるものもあります。この写真の村人たちは仕事から帰るところです。彼らは障壁の反対側に住んでいるので、毎朝障壁まで車で来て車を止め、徒歩で迂回し、それから仕事場や学校までの道のりをタクシーで行かねばならず、帰宅時にはまた同じことをくり返さねばなりません。つまりこれらの障壁は、パレスチナ人が自分の車で通学・通勤するという、基本的なことを妨げているのです。ついには、これらの障壁はパレスチナ経済を極度に損なっています。検問所や障壁のことを考えれば、製品の輸送が簡単ではないことが想像できるでしょう。パレスチナ製品を積んだトラックは、障壁まで着くと、方向転換して障壁に背を向けた状態でバックし、

16:00 もう1台のトラックが反対側からやってきてバックで近づき、この写真のように、障壁のこちら側からあちら側へと人手で運ばなければなりません。運ばれる製品はいつも事務機器というわけではなく、農産物、腐りやすい物、目的地に着く頃には悪くなっているものや、緊急に必要な医療品もあります。単に時間がかかるだけでなく、このような手順での輸送のためにさらに人手や車が必要となり、パレスチナ製品の多くは本来よりも遥かに高価になっています。このため、パレスチナ製品の多くが、イスラエル人専用道路で簡単に輸送できるイスラエル製の競合品よりもずっと高価になっています。その結果、パレスチナ人の市場はイスラエル産品で溢れかえり、やりくりに苦労するパレスチナ人は、結局は安いイスラエル製品を買うことになり、自分たちの経済を支えるかわりに自分たちを占領している当の国を支えることになってしまうのです。

**［入植地］**

17:00 次は入植地についてお話しします。入植地とは、実質的にはパレスチナ人の土地に居住するユダヤ人コミュニティのことです。村や町だったり、都市の形態をしていることもあります。ベツレヘムやエルサレムの近くに大きな入植地があります。何度も言いますが、この土地のすべてはパレスチナの領土でパレスチナ人のものです。国際的にもパレスチナの領土として承認されています。しかし、そのパレスチナ人の土地の丘にこの街が建設され、ユダヤ系イスラエル人だけが住んでいます。これは何を意味するのでしょう？誰がこの街に住めるのか？実は、私もこの街に住むことができます。ユダヤ人だからです。申請書を書くだけで、希望すれば次の週には引っ越すこともできるでしょう。しかし、この街が建設された土地を所有するパレスチナ人の農民自身がそこに住むことはかなわないのです。このプロセスは目新しいものではありません。歴史的に世界じゅうのあらゆる場所で、「植民地化」という名のもとに起きたことです。英語やヘブライ語ではこれを「入植地」という柔らかい表現で呼ぶのは興味深いですね。

18:00 フランス語などの多くの言語では、こうした入植地は「コロニー（植民地）」と呼ばれます。まさに「植民地」そのものなのですから。国際法では、占領者が自分の領土から被占領地に自国民を移動させることは禁止されていますが、これこそまさにイスラエルが行っていることなのです。イスラエルは入植地制度に反対するのではなく、むしろ促進しています。この写真は、占領地のイスラエル人専用道路の上に掲げられた看板です。ヘブライ語で、「今こそこれまで以上に」とあります。その下には、もし私たちのコミュニティ・アリエル入植地に来て住めば、10 万シェケルの報奨金を受けられる、と書いてあります。換算して２万ドル〔約160万円。1ドル＝82円で換算〕以上です。つまりイスラエル政府は、イスラエル領から被占領地に移住して違法な占領住民の一部となるよう、市民にお金を払っているのです。

19:00 この看板について面白いのは、ターゲットとなっている人々です。安いからといって、住みなれた土地から根を断ち切って、見ず知らずの土地に家族ぐるみで移住するようなイスラエル人とはどういう人なのでしょう？裕福で社会的地位の高いイスラエル人でしょうか？いいえ、そういった人が住みたがるのはテルアビブです。政府の申し出を受ける家族というのは、大抵が低所得で貧しいイスラエル人で、最近で言うと東欧やアフリカからの移民です。実際、アリエルを含む多くの入植地には移民が多く住んでいます。「この土地は自分たちのものであり、他の誰のものでもない」と考えてこれらの土地に移住するのではなく、より良い生活を求めているだけなのです。こうした人々にとって経済的支援は非常に魅力的でしょう。政府から住宅ローンの支援を受ければ、素敵な家を手に入れることができます。

20:00 子どもが遊ぶ公園やショッピング・センターもあるし、水がとても貴重なこの土地にプールまであるんです。魅力的な申し出ですよね？でも、何度も言いますが、これらすべてはパレスチナの土地に違法に建設されているのです。現時点で、西岸のあらゆる所に入植地があります。この地図上の赤い点は、パレスチナの土地に建設された違法な、ユダヤ人専用コロニーを示しています。もちろん、入植地とコロニー共に交通網が整備されています。こうして見るとわずかに思えるかもしれませんが、青色で示されている普通道路や高速道路によってパレスチナの土地が細分化されているのが分かります。これらの道路がパレスチナの土地、パレスチナ人が所有している領土に違法に建設されていることを忘れないでください。この土地を所有するパレスチナ人の多くが、道路のこの分離制度のためにこれらの道路を使えません。

**［アウトポスト］**

次はアウトポストについてです。アウトポストは、パレスチナ人の土地に違法に建設され、ユダヤ系イスラエル人が住んでいるという点で、入植地と似ています。

21:00 入植地との大きな違いは、アウトポストを選ぶ住民の層です。先ほど話した「経済的入植者」は、経済的恩恵のためにこれらの土地に移住します。入植者人口の 80%を占めますが、調査ではその大半が、経済的補償があればそこを離れるつもりだと言います。イスラエル政府は何十万人にも及ぶ入植者を退去させるのは不可能だと主張しますが、入植者の大半は政府が資金援助をするからそこに住んでいるのです。入植者人口の残りの 20%は、イデオロギー的入植者と呼ばれ、お金ではなく彼らの信条のためにこれらの土地に移住します。彼らの多くは、宗教的な理由か、もしかしたら政治的な理由から、西岸とガザはユダヤ人に帰属する土地だと信じています。彼らにとっては、パレスチナ人こそがこれらの土地、「ユダヤ人の土地」を占領しているのです。

22:00 そのため、彼らは夜中にパレスチナ人の土地に来てトレイラーで家を建てるんです。「ここは私たちの土地だ。出ていかないぞ」と言って。翌朝農家の主人が起きてみると、自分の土地にアウトポストができています。イスラエル政府はこうした行動を認めないと言いますが、入植者の流入を止めたり、退去を促すことはしません。そのうち、こうしたアウトポストは拡大し始めます。アウトポストに入植者が増えると、子供の学校や安全のためのフェンス、イスラエルと繋がる道路を求め始めます。こうして、気がつくとそこはアウトポストではなく新たな入植地となっているのです。今日ある入植地の多くが、もともとこうした方法で造られ、拡大したものです。一度入植地としてイスラエル政府に承認されると、政府から補助金が出されるようになります。つまりアメリカ政府、つまり私たち〔合衆国市民〕によって補助金が出されるようになるということです。

23:00 米政府は、毎年３～５億ドルの税金をイスラエルの資金援助に充てます。つまり毎日 1 千万ドル以上かけて、これら違法行為が維持されているのです。こうしたことは地球の裏側のことだと思われるかもしれません。アメリカ人には関係ないことだ、と。でも、私たちこそ、これら違法行為にお金を払っている者なのです。私たちには権利があり、自分が払った税金の行方を知る責任や、その用途が人権や国際法、アメリカの法律を侵犯していないかを確かめる責任があります。

これはヤーヌーン村の上にあるアウトポストの写真です。アウトポストの多くは戦略的理由から山頂に建設されます。ヤーヌーン村には 300 人ほどのパレスチナ人が住んでいます。ここに家があって、その上にアウトポストが見えます。村の上にあるアウトポストの１つです。先に述べたように、アウトポストに住む入植者の多くは、パレスチナ人がそこに住む権利は無いと考えています。

24:00 なので、実際に武装して村人を脅しに来るんです。パレスチナ人を自分たちの土地や家から追い出そうと。これは武装した入植者がオリーブの収穫をしている村人を脅している写真です。過去には、村人をめった打ちにしたり、男の子の目を突いたり、お年寄りの女性を杖で叩いたり、村人を殺したり、オリーブを盗んだりしています。覚えていてほしいのですが、占領地のパレスチナ人はいかなる武器も所持することを禁止されています。たしかに武器をなんとか手に入れた一部のパレスチナ人はいます。そうしたことは報道され、私たちも耳にしますが、でも、残りの大半のパレスチナ人はそうではありません。自分を守るためには、石や自分の体しか持たないパレスチナ人に対して、イスラエルの兵士、市民、入植者はたいてい大量の武器を装備しています。これが、被占領地での両者の力関係です。

25:00 入植者はヤーヌーン村の発電機を燃やし、電力を得られないようにしました。これはヤーヌーンの水源ですが、入植者は放尿したり、死んだ鶏を投げ入れたりして、村人が出て行くよう、ありとあらゆることをしています。2002 年末、ヤーヌーンの住民が集まり、この問題に対する結論を出しました。村を去ることにしたのです。300 人もの村人すべてが先祖代々の家と土地を捨てたのです。入植者の存在があまりに恐ろしかったからです。ヤーヌーン村で起きたことを聞いたイスラエルや外国の平和団体が、近くの村に身を寄せていた村人を訪ねました。私たちはこう提案ました。「村に戻るなら、私たちもお手伝いします。皆さんが望む限りずっと、外国人やイスラエル人の活動家も一緒に村に滞在します。

26:00 これらの犯罪を目撃し、記録し、報道するよう努めます。入植者

が攻撃しないよう、あなた方のそばにいます。」私たちの提案に3分の1の村人が応え、村に戻りました。現在 100 人近くがイスラエル人・外国人の平和活動家と共に暮らしています。

これはそうした活動家たちの一人の写真で、デイヴィッドという私の友達です。実は彼も、入植者によるとくに暴力的な襲撃の犠牲となり、顔を打ちのめされました。つまり、入植者はパレスチナ人だけでなく、ヤーヌーン村で農民と連帯して暮らす人間は、外国人であれイスラエル人であれ襲撃するのです。デイヴィッドはパレスチナ領で働き続け、回復に向かっています。彼はユダヤ系イスラエル市民で、私がパレスチナで共に仕事した多くのイスラエル人のうちの一人です。さて、ここで、次のことをきちんと区別して考えることがとても大切です。

**[イスラエル人活動家]**

27:00 ユダヤ人、つまり私のようにユダヤ教やユダヤ文化を出自とする者たちと、イスラエル人、つまりイスラエル国家の市民と、シオニスト、つまり排他的ユダヤ国家という考えを支持する人々の違いを区別するということです。これらは互いに重なりあうものかもしれませんが、それぞれ異なるカテゴリーで、それらを区別することがとても大切です。たとえば、私はユダヤ人ですがイスラエル人ではありません。イスラエル人の中にはユダヤ人ではない人々がいます。イスラエル人口の 20%はパレスチナ人です。そしてシオニストではないユダヤ人もいます。また、ユダヤ人ではないシオニストもいます。たとえば、米国で影響力を拡大しているキリスト教シオニストがそうです。これら3つの概念を一緒くたにするのはとても危険です。なぜなら、これら3つの概念を同じものと考えてしまうと、自分たちが反ユダヤ主義者やナチスになることを恐れ、イスラエルの行いに反対するのを躊躇してしまうからです。それは馬鹿げたことです。正気の沙汰ではありません。占領と抑圧はユダヤ教とは何の関係もないのですから。

28:00 これらのことを批判するのは反ユダヤ主義ではありません。区別することが必要なのです。この写真では、「人権のためのラビたち」という団体のメンバーであるユダヤ系イスラエル人のラビが、パレスチナ人農民と一緒にオリーブの木を植えています。この写真では、イスラエル人活動家が、レスチナ人の仲間と一緒にイスラエルの政策に抗議しています。イスラエルでは、ユダヤ人は男女ともすべて軍隊に行かねばなりませんが、「私たちはこの制度への参加を拒否する」と言って立ち上がったイスラエル市民がこれまでに数千人いました。こうしたイスラエル市民は「リフューズニク(兵役拒否者)」と呼ばれます。米国よりもイスラエルの方が、占領や入植地についての議論や反対意見に対して寛容だということは付け加えておきます。イスラエルの新聞は、米国の主流の新聞よりも占領の実態について率直に報じています。米国の新聞は「占領」という単語さえタブー視することもあるのです。

29:00 しかしイスラエルでは、市民の大部分が入植地と占領に反対しています。一方で米国市民はイスラエル人やユダヤ人を支持するためには、イスラエル政府を支持しなければならないと感じています。でも、彼らは気がついていないのです。米国市民が合衆国政府のすることすべてを支持しているわけではないのと同じように、イスラエル市民も自国政府の政策をつねに支持するわけではないということに。実際のところ、イスラエル軍では、兵士が自殺する確率の方が、彼らがテロ攻撃で殺される確率よりも5倍も高いという統計があります。この占領がユダヤ人のためになると言う人々は、実際にどれだけ多くのイスラエル人が占領に反対し、パレスチナ人にとってだけでなくユダヤ人にとっても占領を終わらせることが重要であるかということに気づいていないのです。兵役拒否者たちは、自分たちのコミュニティ内で差別に苦しんでいます。家族に勘当され相続権を奪われた人もいます。

30:00 兵役拒否者は自分の信念のために投獄されています。就労を禁じられる職もたくさんあります。イスラエルには、政府の行いに対する反対意見を抑えるためにこうした制度がたくさん創られていますが、それでも反対の声は続いています。これは、パレスチナ人農民と一緒にオリーブを収穫しているイスラエル人活動家の写真です。

以上、移動の制限、入植地とアウトポスト、そしてイスラエル活動家についてお話しました。次に、壁と刑務所での勾留、そして抵抗についてお話したいと思います。

**[壁]**

これはイスラエルが建設している壁の写真です。私と友人が壁の前に立っています。この壁は都市部に建設されたものです。高さ7メートルのコンクリート製の壁です。

31:00 みなさんが読まれる〔米国の〕新聞ではこれを「壁」とは呼ばず、「セキュリティ・フェンス」と呼ぶことが多いです。多くの人々は、これがテロを防ぐ防御手段だと信じています。中には、「彼らはこんなに長い間戦っているけど、どちらも平和が欲しいだけなんだ。だからお互いの間に壁を建てれば、たぶん彼らは戦うのをやめ、殺し合いをやめるんじゃないかい?」という人々もいます。これは興味深い問いです。分離や隔離は本当に平和をもたらすのでしょうか?壁について報じる人々の多くは、訊いてみると、壁がどこに建設されているか、実際に地図で見たこともないようです。でも、このことは、壁建設の背後にある意図やそれが実際にどのような影響を及ぼしているのか理解するためにとても重要です。あなたの家とお隣の家の間に壁を建てるとしたら、どこに建てますか?互いの家の境界線上か、ちょっとだけあなたの家の側ではないでしょうか。では、イスラエルがこの壁をどこに建てているか見てみましょう。

32:00 この地図は、西岸地区を囲む境界線を示しています。赤い線が壁の建設ルートです。ご覧の通り、壁の80%がグリーンライン、つまり西岸地区の境界線上を通らずに内側に食い込んで、壁の西側の土地をイスラエル側に併合しているのです。特にエルサレム地域では、大部分の土地がイスラエル側に取り込まれています。言うまでもなくエルサレムは、ユダヤ人だけでなくムスリムとキリスト教徒にとっても聖なる町です。パレスチナ人口の 20%はキリスト教徒ですが、彼らはムスリムたちと共

に、自分たちの土地の宗教的・経済的・地理的中心地から切り離されているのです。西岸地区の東部は壁で切り離される予定でしたが、今は壁を建てる代わりに、パレスチナ人がこの地域を通ることもほぼできないよう、東部に検問所を並べる決定がなされました。

33:00 ですから、ずだずだの分断が起こったのです。西岸地区はいくつもの小さな区域に分断されてしまいました。この4つの地図は、時間の経過と共に起こったことをよく示しています。最初の地図の緑の部分は、1946 年当時パレスチナ人が所有していた土地で、パレスチナ地域の 92%を占めます。一方ユダヤ人はたった8%しか所有していませんでした。そして 1947 年、国連決議 181 号では土地の 54%がユダヤ人に与えられ、パレスチナ人には 46%が与えられることになりました。イスラエルが国家独立を宣言し、1948 年の戦争が終わるころまでに、ユダヤ人・シオニスト軍はパレスチナの 78%を占領し、パレスチナ人に残されたのは 22%に過ぎませんでした。

34:00 最後は、2006 年現在、それがどうなったかです。一連の小島や飛び地になってしまいました。ここで私が住んでいた地域を見ていただきますが、パレスチナ人の土地が壁でいくつもの区画に分断され、引き裂かれています。

この左上はパレスチナ人5万人以上が住む街、カルキリヤです。この街は高さ 7 メートルの壁で完全に包囲され、郊外は現在このようになっています。これは狙撃塔、レイザー・ワイヤー〔剃刀のような金属製の刃がびっしりと並んだ鉄線〕、コンクリートの壁です。これらがカルキリヤをぐるっと取り巻いているのです。現在では「カルキリヤ・ゲットー」、あるいは「野外監獄」とも言われています。たいへん興味深いことに、世界の中で合衆国という地域に暮らす特権的人間である私は、つまりアメリカ人でありユダヤ人であり白人である私は、この壁を両側から見ることが出来ました。これらの写真は、カルキリヤの壁をパレスチナ側から、カルキリヤの街の内側から撮ったものです。

35:00 次にお見せする写真は、全く同じ壁を反対側のイスラエルの高速道路から撮ったものです。興味深いことに、彼らは壁を斜面の上に建て、春には花を植えたので、壁のようには見えません。先ほど言ったとおり、イスラエル人の多くが、アメリカ系ユダヤ人やアメリカ人一般よりも、こうした状況について知っています。とは言え、他方で私は、ほとんどのイスラエル人は、壁がどんなもので、どこに建ち、パレスチナ人の農民や家族に何をもたらしているかを知りもしないと思います。私にはこれが、情報を広めることを妨げる、ある種の検閲のように思えます。

もちろん、検閲は私たちの国にもあります。私の友人がパレスチナからアメリカに帰る時、ドイツで乗り継いだときの話です。

36:00 彼女はそこで『ニューズウィーク』の国際版を買いました。これがその表紙です。一番上に書いてあるように、パレスチナ人の苦境に共感する記事が載っていたためです。そのあと彼女は家に帰るまでにシカゴでまた乗り継ぎ、そこで、アメリカ版の同じ『ニューズウィーク』2004 年8月号を見つけました。内容はほぼ同じでしたが、ひとつ大きな違いがありました。パレスチナ人の苦境についての記事が雑誌から完全に取り除かれ、オリンピックの記事に差し替えられていたのです。それはただ、アメリカ人の中にはが中東に関心がない人がいるからだ、と言う人もいるかもしれません。しかし、特集記事を見てみれば、アメリカ人はもちろん中東に関心があることが分かります。イラクで何が起きているか、レバノンで何が起きているか、という記事があるのです。これはある種の検閲ですが、いたる所で検閲が起きていることを認識する必要があります。検閲はとても危険です。私たちの払っている税金がそこで起きていることに使われているというのに、私たちは何が起こっているのかを知らされていないからです。

37:00 私の言葉を真に受ける必要はありません。どうか自分自身で調べてください。私もこうしたことを最初に聞いたとき、信じられず、自分自身で調べました。これを他の人にも勧めます。今はまた別の検閲、言葉に対する検閲があります。たとえば、「壁」の代わりに、「フェンス」という言葉が使われます。公平を期すため、パレスチナの地方部での壁をお見せします。これは基本的には鉄条フェンスです。しかし、もう少し近づくと、これは私たちの家の裏庭にあるようなフェンスではないことが分かります。その大部分は高圧電線であり、レイザー・ワイヤーで補強されています。

コンクリートの壁の話に戻りましょう。これは東エルサレム近郊にあるアブー・ディース地区です。ここで説明したいのは、壁はそもそも実際の境界線上に建てられていないのですが、パレスチナ人の居住地域とパレスチナ領にあるイスラエル入植地の関係で言えば、壁はパレスチナ人の町や村と、近隣のイスラエル人入植地との間の中間地点に建てられているわけでもなく、また、入植地をイスラエル側に取り込むためだけに、入植地の周りに建てられているのでもない、ということです。

38:00 私の経験では、多くの場合、パレスチナ人居住地域に出来るだけ近いところに壁は建設されます。その結果、入植地だけでなく、入植地と近隣のパレスチナ人の町や村とのあいだにある土地もすべてイスラエル側に入ってしまうのです。

この土地は、ときどきピクニックをするには格好の素敵な場所というだけではありません。ここは近隣の農民と家族が何世代、何百年にも渡って、生活の基盤としてきた場所です。この土地は彼らの暮らしの糧でありながら、彼らから取り上げられつつあります。私の IWPS での仕事の1つが、現在、壁や検問所の反対側になってしまった土地に、農民たちと一緒に行くことです。イスラエルは、農民たちは自分の土地から切り離されているが、決まった時間に彼らが土地に入る許可を出している、と言

います。私が同行しているこの男性は、自分の土地に行きたいと願って、通行口に向かっています。

39:00 彼は自分の土地に入るための許可を求めて出向きました。彼は、壁の反対側にある土地が自分のものだと証明する、オスマン帝国時代にさかのぼる文書も持っていました。しかし彼は、自分の土地を眺めることができても、そこに入ることはできませんでした。私たちは彼と一緒に行き、旗を振って兵士のジープを停め、通行許可が出るよう2日間がんばりましたが、許可は出ませんでした。彼は、もはや自分のオリーブを収穫したいとさえ思っておらず、ただ望みは自分の土地に入ることだけでした。彼は言いました。「ただ私の木の下に腰を降ろしたいだけなんだ」と。しかし、それすらかないませんでした。

さらに人と人との繋がりも断ち切られます。もし村外れに家があれば、壁は村を囲んで建てられるため、家が村から切り離されてしまいます。そうした家に住むムニーラは、実際に次のようなことを経験しました。

40:00 彼女の家の前には、7 メートルのコンクリートの壁があり、ムニーラと夫と6人の子供を村や地域社会から隔てています。家の後ろには、この家族を近くの入植地から切り離すための別の壁があります。家の左右両側には2つのフェンスがあり、彼らを自分たちの土地から切り離し、それらの土地をイスラエル側にとりこんでしまっています。ムニーラと家族は、鳥かごの中に住んでいるようなものです。これがその鳥かごの出入り口です。兵士たちが配置されているのが見えます。後ろで子供と一緒に写っているのがムニーラですが、彼女を訪れる人は、兵士たちの機嫌が良くて、通してくれることを望むしかありません。ムニーラは、この時、鳥かごから外にほとんど出ようとしませんでした。彼女と夫は取り壊し通知を2度受け取っていて、いつ何時、イスラエル軍に家を取り壊されるか分からないからです。ムニーラは幸運な方だと思われています。もし入植地、道、壁の建設予定地に家があれば、フェンスで囲われたり、兵士が配置されたりして悩むことはありません。家はただブルドーザーで取り壊されるだけですから。

41:00 なので、ムニーラは家を離れることを恐れています。出かけて、帰って来たら、家がなくなっていることを恐れているのです。家にいればブルドーザーで破壊されないからというわけではありません。そういう事例も過去に起きているからです。

この写真の左がムニーラで、右が夫のハニー、そして6人の子供のうちの1人です。ハニー一家はマスハ村に住んでいますが、もともとは、1948 年戦争で難民となったために、この村にやって来ました。1947 年、国連でユダヤ国家の領土とされた土地に住む人の大多数はユダヤ人ではありませんでした。シオニスト軍は、75 万人のパレスチナ人を家から追放し、彼らは西岸やガザ、その他周辺地域に離散したのでした。

42:00 ハニーと家族は土地を買い、家を建てるのに十分なお金を貯めるまで、10 年も家のない状態でした。ハニーは家族のために自分の手

でこの家を建てたそうです。このことを考えてみれば、破壊命令や壁、占領は、ハニーや彼らのような家族を、再び難民へと追いやるものです。忘れないでほしいのは、西岸とガザに住むパレスチナ人の 60%はもともと、すでにほぼすべてを失った難民だということです。「パレスチナ人は絶対に妥協しない」と聞いたら、この点に注意してください。私がパレスチナで、パレスチナ人やその家族と会っていつも考えたことは、「人は果たしてこんなふうに生きられるのか？権利や抵抗のために立ち上がることなく、いつまでこんな制度に耐えられるのか？」ということです。

43:00 もちろんその答えは、今も昔もパレスチナ人はずっと抵抗してきたということです。私たちが耳にするのはいつも、無実のイスラエル人を殺す自爆者たちの武装抵抗についてだけです。みな私に尋ねます。「なぜパレスチナ人はいつも爆弾で抵抗するの？なぜいつも自分の体に爆弾を巻きつけ、多くのイスラエル人を殺そうとするの？なぜキング牧師やガンジーが語っているような非暴力の抵抗を行わないの？いったいパレスチナのどこでそんな抵抗が起きているというの？」答えはこうです。パレスチナ人の非暴力の抵抗は、先日はあそこ、今日はここというように散発的に起こるのではありません。彼らはまさに毎日の生活の一秒ごとに、抵抗してきたし、抵抗しているのです。考えてみてください。ムニーラと家族が家にとどまり、「土地も取られた。自由も取られた。でも私たちの家は取られていない」と言うこと、それもまた抵抗なのです。

44:00 これは非暴力の抵抗です。自分の家や土地に戻ったヤーヌーン村の人々のことを考えてください。彼らは入植者から殴られ、殺されるかもしれないと分かっています。だけど自分には家や土地にいる権利があることも分かっていて、その権利を守るために戻るのです。これが非暴力の抵抗です。占領下にもかかわらず、どのようなものであろうとパレスチナ人が日常生活を送り、尊厳を持って生きるためになされる営みのすべてが、占領という制度に対する抵抗だと思います。このことは新聞やメディアの報道では決して知り得ません。他にもパレスチナで日々行われる非暴力の抵抗がいくつもあります。たとえば壁によって自分たちの果樹と切り離されてしまったトゥルカレムの女性たち。生活の糧を失った彼女たちは、家族を支えるために、刺繍製品を売る協同組合を立ち上げました。

45:00 諦めるのではなく、土地から立ち去るのではなく、非暴力で抵抗するのです。このアル＝タワーニー村では、入植者が大麦の種を殺鼠剤で茹で、毒になったそれを土地にばら撒きました。羊が毒をはらんだ草を食べて死んでしまうことを恐れた羊飼いたちが、自分たちの土地に羊を連れて来ないようにするためです。ある羊飼いは、毒のことを知っていましたが、もし彼女が自分の土地に戻らなければ、入植者の思うツボになり、やがて「この土地は誰も使ってない」と言って接収されることも分かっていました。だから彼女は、羊を1頭や2頭失ったとしても、自分の土地に対する権利のために戻るのです。これが非暴力の抵抗です。壁に絵を描くこと、壁に登ること、これが非暴力の抵抗です。

46:00 この少年は、村で見つけた石や鉄線で自分用のバリケードを作っています。彼は「イスラエル軍のジープが今夜、ぼくの村を襲わないよう、バリケードを作るんだ」と言いました。これが非暴力の抵抗です。

最後に、私たちが耳にすることはほとんどありませんが、パレスチナではデモによる抵抗がほぼ毎日行われています。彼らは危険のさし迫った場所に行進していきます。この農民の男性は、木を引き抜くブルドーザーの警護に来たイスラエル兵に話しかけています。彼は、これらの木は、何世代にも渡って彼と自分の家族のものだったと説いています。こ

れもデモで見かけた光景で、パレスチナ人が自分たちの土地で共に祈りを捧げています。

47:00 この光景には特に胸を打たれます。彼らとって、これが自分の土地にいられる最後の機会で、村の人びとが皆、沈黙して土地に祈りを捧げ、最後の瞬間を迎えようとしています。ほとんどのデモは平和的なものですが、催涙ガスや音響爆弾を投げるイスラエル兵の激しい暴力に遭遇します。時には、非暴力のデモに対し、ゴム弾や殺傷能力のある武器も使われます。パレスチナ人側からの暴力も時々あります。これはデモでパレスチナ人の少年が石を拾い、イスラエル兵またはジープに向かって投げている写真です。この点をお話しするのは、石を投げることと、私の IWSP での活動が、何か関係があるから、というわけではありません。ひとつには、投石もこうしたデモの現実だからです。もうひとつには、私たちの視点をさらに広げるためです。

48:00 ここで見たような投石行為を理由に、多くのパレスチナ人の青少年が投獄されています。石が武器である点には同意します。確かに石でも人を殺せます。しかしこうした投石が行われる文脈は十分に伝えられていません。たとえば、この少年は、ユダヤ人を憎んでいて、それでできるだけ大勢のイスラエル人に投げつけようと思って、石をたくさん集めて、イスラエルとの境界を超えてやって来たわけではありません。彼は自分の村にいて、ジープやブルドーザーで村が取り囲まれ、自分の木が引き抜かれ、村の周りに壁を建てられるのをじっと見ています。そして石を1つ拾い、ジープやブルドーザーに投げるのです。

49:00 もしもの話です。誰かがあなたの家に来て、テレビを持ち出し、次にステレオを持ち出し、次にコンピューターを持ち出していったとしたら？あなたはどの時点で、ランプをつかんで彼らに投げつけますか？正当化するために言っているのではありません。それが現実に起きていることだからです。こうした状況で、あなたはどう行動するでしょうか？それは、まさに今、壁に囲まれた状況にあるパレスチナ人の行動と比べてどうでしょうか？さっきも言いましたが、こうした子供たちの多くは、投獄されることになります。これは私が滞在していた場所に近いマルダ村の5人の子供たちです。ある夜、ジープが村を襲い、彼らはジープに石を投げました。怪我した兵士は誰もいません。実際、投石で怪我をする兵士などほとんどいないのです。子供たちも逮捕されたくないので、遠くから石を投げるので。ですが、この5人の子供たちは投石を理由に拘束され、6ヶ月投獄されました。現在、340 人のパレスチナ人の子供と、9千人の政治犯がイスラエルの獄中にいます。うち 10%が、容疑もないまま、無期限に拘束される「行政勾留」という措置によるものです。

50:00 私はラーマッラーで、夫や妻がイスラエルの獄にいる人々が、愛する者の写真を掲げて無言で行進する場面に出会いました。「私たちのことをアメリカの人たちに見せて欲しい」と頼まれたので、こうしてお見せしています。占領地のパレスチナ人成人男性の約 40%が、イスラエル兵によって勾留された経験があります。「アムネスティ・インターナショナル」によると、組織的な拷問と辱めが行われています。

51:00 私が信じられないのは、暴力的・非暴力的抵抗に参加したパレスチナ人が軒並み投獄されているにもかかわらず、また検問所、道路封鎖、入植地、アウトポスト、壁、土地の接収にもかかわらず、パレスチナ人が抵抗を続け、権利のために闘い続けていることです。最後に、私が仲間と撮ったデモの写真をスライドショーにしてお見せします。これは、パレスチナ人の持つ、信じられないほどの回復力と強さを示しています。この回復力と強さこそが、私に未来への希望を与えてくれるものであり、私が皆さんと共有したいと願うものです。

52:00 - 55:00 （スライド・ショー）

56:00 この講演に感動したり、あるいは怒りをかき立てられたら、素晴らしいことですが、それだけでは十分ではありません。パレスチナ人が必要としているのは、気の毒に思ってくれる人ではありません。この問題に対し行動を起こす人です。行動を起こすための案があります。まず自分自身で事態を確かめてください。私の言葉を信じる必要はありませんが、マスメディアの報道を乗り越えてください。パレスチナに行ってください。あるいはパレスチナ人を支援してください。この問題に取り組むためには、何もパレスチナに行く必要はありません。それぞれの地域で、イスラエルからの投資引き上げキャンペーンに参加してください。アパルトヘイト時代の南アフリカでは、「国際法と人権の組織的な侵犯が続く限り、それにお金を払わない」と叫び、投資が引き上げられました。

57:00 報道の偏りを感じたら、地域のメディアに手紙を書いてください。政治家を訪ねたり、電話をかけて、考えを伝え、有権者がこの問題を重要視していることを伝えてください。最後に、友人や家族、地域社会の人々に、壁について知っているか、イスラエルとパレスチナで起こっていることを知っているか、聞いてください。皆さんには地域社会への影響力があります。中東のすべての人びとの安全、平和、正義のために、どうかその力を使ってください。

翻訳： 今野泰三、伊良波美奈子、金城美幸、田口眞吾、花輪正士、萩原奈苗